

〔本朝醫談〕脚氣に杉の洗藥は、蘇敬に初り、丹溪も用ひき、證によりて効なき事もあるべし。  
〔簾中抄下〕この湯あむる日

正月二日 二月三日 三月六日 四月四日 五月一日 六月二十一日 七月七日 八月八日  
九月二十日 十月八日 十一月二十日 十二月三十日

この日ごとくに、くごをゆに入てあむれば、色あはひよくなりて、おいにやまひせず。

〔年々隨筆六〕又○南留源氏物語をみれば、病に藥用する事はすくなく、大形は祈禱をのみしたる

やうなり、今も田舎のものはかくの如し、鬼を尊べる風俗の弊なるべしと有、延喜式、政事要略などをみるに、むかしとても病には必醫藥をもはらにせし事なり、源氏物語をふとうちよみて、藥を用する事なしとはいひ難し、葵卷に、いざや聞えまほしき事いと多かれど、またいとたゆげにおぼしためればとて、御ゆ○まわれなどさへあつかひ聞え給ふを云々、柏木の卷に、宮はさばかりひはつなる御さまにて、いとむくつけうならぬ事のおそろしうおぼされけるに、御ゆ○などもきこしめさず、身の心うき事をかゝるにつけてもおぼしいれば、さばれ此ついでにもまなばやおぼすとある、御ゆは藥なり、これ卷々に多かり、そのかみは驗者のいのりにて病の癒し事なれば、鬼を尙べる弊風俗ともいひがたし、畢竟は醫といふもまじなひ也、豎といふ字の巫に従へるはまじなひなる故なり、丹波康世の豎鍼法をみるに、多く千金方によりて、方ごとに呪文有、合にも典藥寮に、呪禁師、呪禁博士、呪禁生ありて、まじなひて病を療す、此呪禁は、唐書百官志にも有、皇國のみ鬼を尙ぶ弊風なるにはあらず、

〔醫心方一〕服藥節度第三○中

本草經云、治寒以熱藥、治熱以寒藥、飲食不消、以吐下藥、鬼注、蠱毒、以毒藥、癰腫、瘡瘤、以瘡藥、風濕、以風濕藥、各隨其所宜、又云、病在胸膈以上者、先食後服藥、病在心腹以下、先服藥而後食、病在四支、血脈